Video Workshop | Surgery

Fri. Nov 20, 2026 8:30 AM - 10:00 AM JST | Thu. Nov 19, 2026 11:30 PM - 1:00 AM UTC | Room 2 (2F Convention Hall 2)

Video Workshop 1 Strategies for Reducing Stoma-Related Complications: Optimizing Stoma Creation and Managing Complications 1

司会：長谷川 博俊（医療法人社団幸隆会 多摩丘陵病院）、本郷 久美子（平塚市民病院）

[VWS1-3] Optimizing Stoma Creation and Reducing Stoma-Related Complications in Robot-Assisted Rectal Cancer Surgery

*Masaru Sasaki[1] (1. Department of Gastroenterological Surgery, Higashiosaka City Medical Center)

近年、進行直腸癌に対する集学的治療およびロボット支援手術の普及に伴い、ストーマ造設を要する症例は増加している。通過障害や出血などの症状を伴う進行症例では、diverting stoma造設後に術前治療を行い、原発巣切除および最終的なストーマ閉鎖を目指す。一方、低位吻合を伴うロボット支援手術では、縫合不全対策としてcovering stomaは重要な役割を担う。しかし、適応に応じた使用腸管や最適な造設位置については、未だ一定の見解がない。
当施設では、2022年から2025年に集学的治療を前提として造設したdiverting stomaにおいて、長期管理や永久ストーマ移行の可能性を考慮し、89%の症例で右側横行結腸を選択した。造設位置は、放射線照射野との干渉回避と原発巣切除時のロボット操作性を両立させるため、全例で術野外の右上腹部としている。
一方、covering stomaでは、造設・閉鎖手技の簡便性と閉鎖時合併症低減を目的に回腸ストーマを基本とし、右下腹部のストーマサイトマーキング部をロボットポート孔に兼用することで追加創を回避している。ポート孔でのストーマ造設は合併症増加の要因となる可能性も懸念されるが、過去10年間のcovering stomaを伴う直腸癌手術例を検討したところ、ロボット支援手術におけるポート孔利用例と、腹腔鏡手術における新切開造設例との間で、ストーマ関連合併症に有意な差は認めなかった。
また、腹会陰式直腸切断術では後腹膜経路での永久ストーマ造設を基本としている。ロボットの視野と可動域を活かした効率的な後腹膜経路作成が可能であり、癒着性腸閉塞や傍ストーマヘルニアなどの晩期合併症抑制に寄与する可能性がある。
本発表では、これらロボット支援下直腸癌手術におけるストーマ造設や関連合併症低減に向けた工夫について、実際のビデオを供覧しつつ報告する。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会